

ちどり 令和3年3月度特別作品

姉
ちどり

昨年十一月、姉が六十九才で永眠しました。アルツハイマー病になり二十年間の痲痺生活でした。次女の姉が幼少期に亡くなり、私達は二人姉妹として生きてきました。とてもやさしく、スポーツマンで美人の姉でした。

姉との六十余年をしっかりと記憶に留めておこうと思いい、十句の俳句にまとめました。
お姉さん、ありがどう。お義兄さん、姉をずっと支えてくれてありがどうございます。

下萌や男子の中の草野球

日焼してテニスボールを追ひにけり

奥山の姉に呼びかけ茸狩

早起きの姉の作れる根深汁

姉の家池に睡蓮咲いてをり

兄のする寄鍋の湯気立ちにけり

母が家に姉と見つけし路の蓋

山茶花や姉を支へて散歩する

室の花紅差す姉の眠りけり

買物に姉の形見のコート着る

《作品鑑賞》

亜矢

「姉」は、作者とお姉さん夫婦との思い出が平明にさらりと詠まれた作品である。しかし、作者とお姉さんとの強い絆が十分伝わってきて、それが十句目に集約されていると思う。

早起きの姉の作れる根深汁

元気な頃のお姉さんだろうか、働き者だったのだろうと想像する。熱々の根深汁をすす作者の姿はとても幸せそうでほほえましい。

兄のする寄鍋の湯気立ちにけり

闘病中のお姉さんにかわりお義兄さんが寄鍋を作った。蓋を開けた瞬間、湯気が立ち上る。姉妹の幸せそうな姿が伝わってきて、目に浮かぶようである。

山茶花や姉を支へて散歩する

姉への愛が痛い程伝わってくる句。それは山茶花だからに他ならない。きつと会話がなくても通じ合える仲だろう。

雪と生きた日々

松本恵和

雪は私の成長の一ページで、冬は雪の中の生活だった。今では東北の雪も少なく、今年の縁を雪は珍しい。私の子供時代は、雪と戦い、雪と戯れた。一本道を転びながら学校に通った。箱ソリで坂道を滑り、積雪でかまくらも作った。しかし、東北の雪国と違い、雪装備はいい加減であった。父母は忙しく、私たちと遊ぶ暇はなかった。私達は子供同士で遊んだ。その雪も今では良い思い出として残り、心を躍らせるのである。

鉈を振る父と登りし冬の山

枝の雪落ちて転がる雪の玉

埋火を熾し囲炉裏に灰の飛ぶ

囲炉裏端濡れた長靴並べ干し

妹は炬燵の母のいつも横

野も山も青く輝き雪の夜

雪晴に戸を開け放ち掃き掃除

寒曳山スキー担いで登りけり

人型となりて樹氷の迫りくる

堅雪の田んぼの上を走りけり

《作品鑑賞》

亜矢

「雪と生きた日々」は、作者の自然や家族に対する愛情がひしひしと伝わる作品である。子供時代の思い出を十句にまとめているのだが、数十年前の出来事と感ぜさせない程、新鮮味に満ちている。

妹は炬燵の母のいつも横

姉である作者の、妹をうらやむ気持ちと妹を愛する気持ちの両方が伝わってくる。時には妹にかわって、自分が母親の横にいたかっただろう。下五に作者らしさを感じた。

野も山も青く輝き雪の夜

私は雪国に住んだことがないので、なんと幻想的な景なんだろうと驚いた。自然の美しさと厳しさが伝わってくる。一枚の絵のようだ。

雪晴に戸を開け放ち掃き掃除

掃除をしているのは姉妹だろうか。毎日の営みが自然に寄り添っていて瑞々しい。